

奈良近代文学事典

# 奈良近代文学事典

浦西和彦・浅田 隆・太田 登 編

和 泉 書 院

編者略歴

浦西和彦(うらにしかずひこ)

1941年、大阪市生まれ。関西大学卒業。現在、関西大学教授。

著書『日本プロレタリア文学の研究』(桜楓社)他。

浅田 隆(あさだたかし)

1943年、兵庫県生まれ。立命館大学大学院卒業。現在、奈良大学教授。

著書『葉山嘉樹論』(桜楓社)他。

太田 登(おおたのぼる)

1947年、奈良市生まれ。立教大学大学院卒業。現在、天理大学助教授。

共編著『石川啄木集歌集編』(和泉書院)他。

省  
檢  
略  
印

奈良近代文学事典

一九八九年五月三〇日 初版印刷  
一九八九年六月二〇日 初版発行

編者 浦西和彦  
浅田 隆  
太田 登

発行者 廣橋研三

印刷所 コトブキ企画  
明新印刷  
森岡製版

製本所 小幡製本所

発行所 和泉書院

大阪府天王寺区上沙野一三八(〒五四三)  
電話 六七一四六五 振替 大阪七二五四三

ISBN4-87088-359-7 C1591

定価はケース・帯に表示。

## はしき

日本の精神的風土について考えようとするとき、奈良やまとの文学的風土は見過ごすことの出来ない極めて重要な位置を占めている。しかし、それは一般的に記紀・万葉の上代や軍記物語の中世に限定されがちである。だが、明治以後の近代文学、あるいは今日の現代文学においても、奈良やまとにかかわりの深い作家や作品は、枚挙にいとまがないほど多い。奈良が文学の場として近代以後も連綿と生き続けている事実は意外にも等閑視されているようだ。

近代や現代の文学者たちが奈良やまとをどのような角度、視点から描いたか、奈良という風土や歴史が文学者たちにどのような精神的影響や作用を与えたか、近代や現代の日本の精神風土のありようを逆照射する意味でも大事であろう。だが、近代あるいは現代文学における奈良やまとの位置をトータルなたちで考察することは極めて困難な実状にある。また、その研究も著しく立ち遅れ、ほとんど未開拓のままとなっている。その立ち遅れの原因の一つには、奈良やまとは近代・現代文学とのかかわりの実相をトータルな形で示す資料が乏しいことにあると考えられる。

そこで、明治・大正・昭和の日本近代文学の全作品、小説・戯曲・児童文学・評論・随筆・詩・短歌・俳句・川柳といった、あらゆるジャンルを踏査し、奈良と関係のある作家・作品の探索に努めるとともに、それぞれの項目について、簡にして要を得た解説をほどこすことによって、研究者はもちろん、文学愛好者や地方文化・歴

史研究家にも適切な指針となり、また広く実際に役立つ事典となりうるものを提供したいという意図のもとに編集したのが本事典である。

もとより十全の事典などありえようはずがない。このささやかな本事典の試みにしてもなお多くの問題が残っているであろう。しかし、ともかくこの小事典が一つの手がかりとして奈良近代文学に関心を持つ人々の座右に置かれ、読者諸氏のご批判、ご教示にあずかることができるならば、編者一同としての喜びこれに過ぐるものはない。いつの日にか、改版の機至るときには、修訂増補して、十全を期したいということが編者一同の願望でもある。

最後に、ご多用にもかかわらず、本事典のためにご執筆くださった、池川敬司、内山照美、越前谷宏、大田正紀、小川直美、北川秋雄、澤正宏、清水康次、田中励儀、戸田美智、永栄啓伸、中尾務、中川成美、堀部功夫、村上悦也、山内祥史、和田博文らの諸氏に、また、項目選定につき、ご教示をたまわった、粟田茂、神堀忍、橋本直紀、肥田皓三、和田博文の諸氏に深く感謝の意を表したい。

本事典の出版をお引受けくださった和泉書院、廣橋研三氏に厚くお礼を申しあげる。

昭和六十三年九月八日

浦西和彦  
浅田隆  
太田登

## 凡 例

\* 本事典は奈良を対象とする文学事典であり、スペースは奈良に関する事項を軸に配分した。

\* 人名項目は、奈良県出身者、奈良に居住、または一時在住したことのある文学者、あるいは奈良を作品に描いたことのある文学者、及び一部関連ジャンルの奈良県出身者で構成し、それぞれ五十音順に配列した。

収録人名項目は六八六件である。また机上版『日本近代文学大事典』に未収録で、本事典には収録されている人名項目は三〇一件である。

\* 枝項目（作品名）はその文学者の代表作を取りあげるのではなく、奈良を題材とした作品、奈良を描いた作品に限定し、小説、戯曲、評論、随筆、児童文学、詩、短歌、俳句、川柳などのジャンルを対象とした。

\* 枝項目（作品名）の配列は原則として発表順とし、枝項目で取りあげない場合は人名項目の文中に作品名を記載した。

\* 人名項目は人名の読み、生没年月日、出身地、活動分野、本名、筆名、雅号、略歴などで構成した。

\* 各項目については執筆者の記述にしたがったが、事典の性質から、最少限の記述の統一をはかった。

\* 解説文は原則として新漢字、現代かなづかいとし、引用文は原文のままとした。

\* 年代表記には日本年号を用い、初出のみ「明治十年」などと記し、以下同じ年号の年次は「十五年」「二十一年」などとして年号を省略したが、年号や年次が戻ったり、文章が長い時は年号を繰り返すこともある。

また慶応以前については西暦を併記することとした。

\* 雑誌名、新聞名、作品名は「」で、単行本は『』で記すこととした。

\* 数字の表記は漢数字とし、（ ）内に限りアラビア数字を用いた。

\* 引用詩篇の「／」（斜線）は原詩における改行を意味する。

\* 本事典の項目の記述内容は、原則として、昭和六十二年十月末現在とした。

\* 本事典は使用上の便宜のため、付録として枝項目（作品名）索引の他に、県下の博物館・美術館・

図書館所在地一覧、奈良年中行事一覧、ならびに奈良出身文学者名簿を付載した。

# 目次

- はしがき……………(一)
- 凡 例……………(三)
- 奈良近代文学事典……………一
- 博物館・美術館・図書館所在地一覧……………三九
- 奈良年中行事一覧……………三三
- 奈良出身文学者名簿……………左12
- 枝項目(作品名)索引……………左1

## あ

阿以鎮雄<sup>あいでいけん</sup> 大正十・十・十三。俳人。大阪市天王寺区に生れる。本名横山八宗次<sup>やまきじ</sup>。現在、奈良市七条西町に在住。「金剛」「赤楊」を経て、「頂点」「花曜」同人。句集「龍門」(昭53)、「躑躅」(昭61)。「鑑真の良夜ごわごわ蓮の葉」。

(浦西和彦)

会津八一<sup>あいいち</sup> 明治十四・八・一。昭和三十一年・十一・二十一。歌人、美術史家、書家。別号秋艸道人、渾斎。新潟市に父政次郎、母イクの次男として生れ、別家会津家を嗣いだ。早稲田大学英文科卒。新潟中学時代から『万葉集』を愛読、郷土の先覚良寛の和歌に親しむ一方、正岡子規に傾倒し、「ホトトギス」に投句した。明治三十五年、上京して東京専門学校に入学、英文科を専攻。卒業論文は「キーツの研究」。三十九年、早大を卒業し、新潟県中頸城郡の有恒学舎の英語教師として赴任。四十一年八月、二十八歳の時はじめて大和路をめぐり、いわゆる奈良歌詠を試み、奈良の古美術への造詣を深める。この折の作歌は、第一歌集『南京

新唱』(大13・12)に収められている。四十三年、恩師坪内逍遙の招きで早稲田中学に転任。大正二年から八年まで早大文学部講師も兼ねた。

大正九年から十一年にかけて、精神的にも身体的にも不調であった八一は奈良飛鳥園の仏像写真家小川晴暘を見出し、博物館前の日吉館を常宿とする奈良行脚にあけくたした。この時期、奈良美術研究会を創立し、(奈良は小生第二の故郷)という感想をもつにいたる。十四年、早稲田中学を辞し、早稲田高等学院教授となる。これ以後、大学では奈良美術史・東洋美術史を講義、昭和四年浜田青陵、天沼俊一らとともに飛鳥園から雑誌「東洋美術」を刊行するなどして、その美術研究は本格化する。六年文学部教授となり九年には多年の労作である『法隆寺、法起寺、法輪寺建立年代の研究』(昭8・5)によって文学博士の学位を受けた。早大恩賜館内に東洋美術史料陳列室を設け、文学部に芸術専攻科が設置され、その主任教授となる。このころから作歌活動もともに旺盛となり、十五年には『鹿鳴集』、十七年『渾斎隨筆』、十九年『山光集』を刊行、歌壇とはかわりなく独自

の歌境をきりひらいた。

二十年四月戦火のため東京下落合の自宅を焼失、養女きい子とともに郷里に帰住。この晩年の寂寥たる心境を詠みこんだ『寒燈集』(昭22・4)、「会津八一全歌集」(昭26・3)によって歌人としても不動の地位をきずく。「夕刊ニイガタ」社長、新潟日報社社賓、早大名誉教授、新潟市名誉市民として世を終えた。墓地は新潟市西堀通端光寺。分骨による別墓は東京都練馬区の法融寺にある。奈良には新薬師寺をはじめとして多数の歌碑が建てられているが、そうした歌碑案内や奈良とのかかわりについては、山崎方靖の紹介(『奈良県観光』)に詳しい。『会津八一全集』全十二巻(昭57・59、中央公論社)があり、参考文献として小笠原忠「歌がたみ奈良」(昭42・1、宝文館)がある。

\* 南京新唱<sup>なんきんしんしょう</sup> 歌集。(初版) 大正十三・十二、春陽堂刊。◇ 南京<sup>なんきん</sup>は南都とひとしく奈良の別名で、「われ奈良の風光と美術とを酷愛して、其間に徘徊することすでにいく度ぞ。」(自序)という八一の古都奈良への愛情の深さがその歌集名にうかがえる。奈良をはじ

めて訪ねた明治四十一年以後の作一五〇首を、「南都新唱」「山中高歌」「放浪吟草」「村莊雜事」の四部に分けて収録。さすが野に押し立てるつきのほがらかにあきのゆふべとなりけるかも」にはじまる歌集本文は、もともと「著者の原稿は通巻ただ平仮名のみにて認めたる」(「会津八一全歌集」例言)ものであったが、出版元の意向で若干の漢字を交えた平仮名書きにあらためられた。この特異な表記は、「いく度もくりかへし口ずさみて、おのずから詠じ据えたるもの、これ吾が歌なり」とする、調べを重んじる八一の作歌態度の反映によるものである。初版の八〇〇部をすべて三版本として刊行したが、実際には思ったほど売れず、反響もさして大きくはなかった。しかし、いわゆる結社短歌とは異なる典雅で清新な秋艸道人調の詠風をきわめてゆくことを明示する意義深い歌集である。太田登「会津八一『南京新唱』の世界」(「青須我波良」昭62・12)がある。

\*自註鹿鳴集しかうめいしゅう 歌集。(初版)

昭和二十八・十、新潮社刊。◇本歌集は、その自序に「予が家の鹿鳴集は、

昭和十五年創元社より世に送りとるものなるもの、その中には、大正十三年春陽堂より出したる南京新唱の全篇を含み、またその南京新唱の中には、明治四十一年奈良地方に一遊して得るところの歌若干首を含めるが故に、今ここに収むるところは、実に二十八歳より六十歳に至る予が所作を網羅したりといふべし。」とあるように、すでに齢七十をすぎた秋艸道人会津八一にとっていわば最後の著作であった。歌集例言によれば、「鹿鳴とは、巻中の歌、著者が青年の日よりしばしば奈良地方に遊び、その間に成れるもの最も多きに居れば、これに因みてなり。」というように、その命名には「南京新唱」「南京余唱」と同じくかれの古都奈良への思慕の深さがくみとれる。八一みずから「京都奈良の地は、古美術の淵藪と称すべし。作者は常にこの間に徘徊して、さきに自ら詠ずるところを今自ら註解して、この書を成したるも、通篇の中未だ曾て好んで美術の趣味とその好悪とを説明せんとしたることなし。」と言明するように、八一が病気がちの最晩年にあつて、たんなる短歌鑑賞や

古美術案内をこえた、最後の学問的良心をかたむけた記念すべき著述であった。本書は新潮文庫・中公新書などにも収められ再三の公刊をみたが、昭和四十年二月、宮川寅雄の詳細な解説をえて中央公論美術出版から定本として刊行された。宮川寅雄編、入江泰吉写真の『カラー会津八一鹿鳴集奈良』(昭50・6、淡交社)も便利である。

(太田 登)

饗庭簗村こうてい とうむら 安政二(一八五五)・八・十五〜大正十一・六・二十。小説家、劇評家。江戸・下谷龍泉寺町に生れる。本名饗庭与三郎。別号龍泉居士、太阿居士、竹の屋(舎)主人。祖先は近江・饗庭村の医家。父与之吉は文化年間に江戸へ出て、呉服商、のち質屋を開業。安政大地震の時、母が梁の下じきになって死去。与三郎は庭に投げ出され、隣人の竹村に助けられる。慶応元年六月、日本橋にある質屋箱根屋に見習住み込み、主人の感化で芝居や俳諧などを知る。明治七年、読売新聞社に入社し、文選校正に従事。そこで高島藍泉に文才を認められ、九年に編集記者となった。『当世商人氣質』(『読売新聞』明19・3・5)を連載して

文壇に認められ、代表作「人の噂」(「読売新聞」明19・7)等を発表。二十二年三月、森田思軒・須藤南翠と「新小説」の編集主任となる。同年七月より、小説紀行文集『むら竹』全二十巻(明23・12完結、春陽堂)を刊行。二十二年十二月、東京朝日新聞社に入社し、以後、没するまで同紙に劇評・小説を執筆。奈良へは、二十六年四月一日より、根岸党の人々とともに月ヶ瀬へ観梅に出かける。

＊月ヶ瀬紀行つきがせ 紀行文。(初出)「東京朝日新聞」明治二十六・四・五、十六、二十、二十一、二十二、二十三、二十八、二十九、三十、五・三、五、六、十の十三回発表。◇富岡永洗(秀太郎)・高橋太華(七郎)・寺堂得知(鈴木利平)・幸田露伴(成行)・檜崎海運(正兵衛)・森田思軒(文蔵)・関根只好(重四郎)・竹の屋(饗庭与次郎)の八名が昨年よりの約束で、明治二十六年四月一日午前十一時四十分新橋発の汽車で、梅を慕い、伊賀上野から入り、月ヶ瀬から吉野をめぐる賑やかな旅の記録である。

(浦西和彦)

青木稲女あおき いなによ 明治三十一・十一・九

昭和三十三年・三・二十五。俳人。旧姓

吉田。東京市浅草蔵前に生れる。大正六年、大阪に移り、定時制の日英学館を経営。野村泊月・西山白雲に師事。昭和十年、道頓堀の「稲女バア」を止め、天理教に入信。天理市へ移住し、教校別科を終えた。「天理時報」の俳壇選者。十三年、「麦秋」を主宰。句集『田舎』(昭26・10・10、麦秋社)。「池へだて二階堂村誘蛾燈」。

(浦西和彦)

青木月斗あおき げと 明治十二・十一・二十

昭和二十四・三・十七。俳人。大阪市東区南久太郎町に生れる。本名新護。家は船場の薬種商を営み、高等小学校を卒業後、大阪薬学校を経て、早逝した兄にかわって家業をついだ。幼少期から母の感化で俳句をたしなみ、明治三十二年大阪で三日月会を結成、俳句雑誌「車百合」を主宰、正岡子規の激励をうける。大正四年「ホトトギス」の課題選者となり、

九年には「同人」を創刊、関西俳壇に重きをなすのみならず、句作第一主義をとって全国有数の俳誌に飛躍させた。太平洋戦争下、心臓を病んで奈良県宇陀郡大字陀町に疎開し、この地で病没。没後に

鈴木鶉衣編の『月斗翁句抄』(昭25・3、同人社)が刊行された。当麻の練供養を

詠んだ「練供養二つの塔を望み来し」がある。宇陀郡松山町の森野旧薬園に町内の大和博風社同人によって、昭和三十一年に「薬園の風露に秋の近づきぬ」の句碑が建てられた。

(太田 登)

青木健三あおき けんぞう 大正六・十二・九

詩人。号楽史。大阪市築港町に生れる。昭和十年三月、市岡中学校卒業、奈良市西大寺赤田町へ移住。十五年三月、天理外語中国語部卒業。大阪府職員を五十二年三月退職。詩歌集『青仁芳』(昭58・12・1、私家版)。

(浦西和彦)

青木はるみあおき はるみ 昭和八・八・四。詩人。本名春美。神戸市に生れる。兵庫県立西宮高校卒業。昭和五十年、第十三回現代詩手帖賞を受賞し、新鋭詩人としてデビューした。「現代詩手帖」(昭50・5)の「現代詩手帖賞選考」によれば、「年間作品ベスト・テン」に「ダイバースクラブ」を含む四篇の作品が入り、「いい意味でのコンスタントなものを持っている」(清水哲男)ことが選考理由であった。

三年後の昭和五十三年に刊行された「ダイバースクラブ」や、思潮社新鋭詩人シリーズの九冊目として刊行された『青木はるみ詩集』(昭54・11)で新人としての

地歩を固める。五十六年、「事故」という作品で第十三回関西文学選奨に選ばれ、翌五十七年には『鯨のアタマが立っていた』(昭56・11)が第三十二回日氏賞を受賞した。「歷程」「たうろす」同人として活動が続けながら、朝日カルチャーセンター・大阪文学学校・神戸市民の学校などに出演。沖積舎現代女流自選詩集叢書六冊目として『ひまわりを五十三ばん切る』(昭58・7)を、思潮社現代詩書下し詩集二冊目として『大和路のまつり』(昭58・10)を上梓する。浜いさをの写真と青木の詩で構成した共著『詩と人形のルフラン』(昭62・1)もある。昭和六十六年九月には第十二回井植文化賞(文化芸術部門)を受賞。

**\*ダイバーズクラブ** くらぶ だいはあす 詩集。(初版)昭和五十三・九、思潮社刊。◇収録作品中「すでに夜だろうすでに朝だろう」には「あやめ池のまわりをあやめ号がはしる」という一行があり、「鬼籍」にも「あやめ号」は出てくる。また「途」には「私は雨を踏んで不退寺への道を右わきに外れ」という一節が、「タイトルを借りる」には「元興寺の境内で彫塑展がひらかれていた」とい

う一節が、それぞれ認められる。更に「透き影」には「あじさいの寺」が、「踊り子」には「石切」が出てくるなど、青木が在住する奈良とその周辺の風土の気配が、詩集全体から伝わってくる。

**\*鯨のアタマが立っていた** がくじらのあたまがたっていた 詩。(初版)『鯨のアタマが立っていた』、昭和五十六・十一、思潮社刊。◇詩集題名になった作品。『きのう和歌山の沖で獲れた鯨がもう奈良まできたよ』という「声」が作中にある。

**\*大和路のまつり** やまとじ 詩集。(初版)昭和五十八・十、思潮社刊。◇「氷室神社の献水祭」「地黄のスミ付けまつり」「蛇穴の汁かけまつり」「薪能」が五月、「率川神社の三枝まつり」が六月、「石上神宮の神剣渡御祭と夏越えの祓い」「かわや」「蔵王堂の蛙飛び」「お峰デンソソ」が七月、「大柳生の太鼓踊り」が八月、「吉田寺の腰巻祈禱と放生会」が九月、「往馬坐伊古麻都比古神社の火まつり」「鹿の角伐り」が十月、「談山神社のけまり」が十一月、「春日若宮おんまつり」が十二月というように、大和路のまつりを取材して作品を書き、

まつりが行なわれる月順に作品を配列している。以下「大和神社の弓始祭」が一月、「飛鳥坐神社のおんだまつり」「江包、大西のお綱まつり」「広瀬神社の砂かけまつり」「六県神社の子できおんだ」「国栖奏」が二月、「二月堂の修二会」が三月、「おまつりの馬」「大和神社のちゃんちゃんまつり」「花拵えの家」「薬師寺の花会式」「法華寺のひな会式」「灌仏会」「西大寺の大茶盛」「当麻寺の練供養会式」「大神神社のはなしずめのまつり」が四月と、作品は続いている。この詩集には「定住者の眼 取材日記より」という葉が挿まれており、実際の取材の様子や感想が書き込まれ興味深い。ちなみに五月の水室神社の献水祭を見に行くときには、「水室神社の存在に気付かないで来た」ことに「啞然とし」ながら、「奈良に住んで十二年、ほとんどの杜寺を知っていたつもりだが、それは有名な所に限られていたのだ。つまり単に観光客の目しか持ちあわせていなかったのである。そろそろ定住者としての視力の必要を痛感する」という感想を青木は洩している。「四月二十六日から五月十一日の十六

日間をかけて二十六篇書きあげ」最終的には三十一篇になったが、「書きあげた作品は、じっさいに行ったまつりの数からいえば、ほんの一部」であった。函と扉も含めて、藤井金治撮影のまつりの写真十七葉が併せて収録されている。

(和田博文)

青野季吉 あおのすえ 明治二十三・二・二十四

昭和三十六・六・二十三。評論家。

新潟県佐渡郡沢根町に生れる。大正四年三月、早稲田大学文科英文科卒業。読売新聞社・大正日日新聞社・国際通信社記者。大正十一年四月、市川正一・平林初之輔らと「無産階級」を創刊。五月、「心靈の滅亡」を「新潮」に発表し、文芸評論の筆をとる。同年七月に結党した日本共産党に入党。「種時く人」同人。プロレタリア文学運動では労働芸術家連盟に属した。「調べた芸術」を提唱し、「目的意識論」を展開して、「文芸戦線」派の理論的指導者として活躍した。昭和十三年二月、人民戦線事件で検挙され、翌年五月、保釈出獄。十五年十一月七日、正倉院の御物を拝観に博物館へ出かけ、日記に「感動す」と記す。十九年三月十一日から十五日まで、奈良へ旅行した。戦後は、日

本ペンクラブの再建につとめた。二十六年三月、日本文芸家協会会長に就任。訳書『蒼ざめたる馬』(自由文化叢書、大8・15、冬夏社)、著書『解放の芸術』(解放群書2、大15・4・13、解放社)、『マルクス主義文学闘争』(昭4・12・1、神谷書店)、『文芸と社会』(昭11・4・3、中央公論社)、『文学五十年』(昭32・12・20、筑摩書房)等がある。

\*一つの悲願 ひとつのかなしみ 随筆。(初出)上司

海雲編『雄華厳浄』昭和十八・十・十五、雑華乃蘭発行所刊。◇これまで奈良へ時々立ち寄って、古寺や仏像を巡礼しているが、しかし「私には、奈良を知つてゐると云ふ自覚がさつぱり」ない。知つたというのは、「千年を越えた昔のままを想ひ浮べられる」のでなければならぬ。全体としての天平の文化を「生きて動いてゐる旺んな形として想ひ浮べる」とは、私には容易ではない。そこで観るものの立場を越えて、昔の芸術家のこころに成つて見ることが、私の一つの悲願であるという。

(浦西和彦)

赤江瀑 あかえ 昭和八・四・二十二。小

説家。本名長谷川敬。下関市生れ。日大

芸術学部中退。在学中から詩誌「世紀」に詩を発表。谷崎潤一郎・三島由紀夫らの影響を受け、処女小説「ニジンスキーの手」(昭45)で小説現代新人賞を受賞。「オイディプスの刃」(昭49)で角川小説賞、「八雲が殺した」(昭59)で泉鏡花賞を受賞するなど旺盛に活動を続けている。

\*春喪祭 はるもくさい 小説。(初出)「太陽」

昭和五十一年・四。のち作品集『春喪祭』

(昭52・3、徳間書店)に短篇五篇と

ともに収録。翌年徳間文庫。◇伝奇性・幻想性の漂うロマン。野田涼太郎は吉村深美の消息を深美の自殺後に学友から聞かされた。深美は初瀬川の中に、琵琶の撥で手首を切つて死んでいたという。在学中はクラブで琵琶をやっていたが、彼女は死に際し三首の歌を琵琶の裏甲に書き残していた。なぜ彼女は死んだのか。なぜ死なねばならなかったのか。長谷寺全山に七千株におよぶ牡丹が咲き競う花時が過ぎようとする頃のこと。

(浅田 隆)

赤阪かず子 あかざか かずこ 大正十四・一・三十。

歌人。奈良県五條市上野町に生れる。昭和十九年三月、奈良師範学校女子部卒業。五十六年まで小学校教諭。二十年八

月、勤務校において爆撃にあい負傷する。四十年四月、「白珠」に入会、安田章生に師事。四十五年「未来」会員。五十九年「群帆」会員。歌集『荒坂峠』（昭59・8、短歌新聞社）。「蕎麦の種播きし平城宮跡よ炭材をかつぎて降り来し黒髪山よ」。

（浦西和彦）

明石鉄也（あかし てつ） 明治三十八・六・十一。

小説家。鳥取県に生れる。本名永井恭。第三高等学校を経て東京帝国大学仏文科に入学したが、三年で中退。昭和三年二月、左翼芸術同盟を壺井繁治らと結成。

アナーキストとして出発した。同年五月、処女作「起重機」を「左翼芸術」に発表。同月、左翼芸術同盟が全日本無産者芸術連盟に合同し、ナツプに加入する。四年六月、「故郷」が「改造」懸賞小説に当選。『失業者の歌』（昭5・6・12、先進社）、『鉄の規律』（昭5・11・10、改造社）などを刊行し、ナツプ系の有力な新人作家として活躍した。戦時中は大衆小説や歴史小説に転じ、『尊皇正気の歌』（昭16・12・25、霞ヶ関書房）、『呂宋の月』（昭18・1・15、室戸書房）、『桜に誓ふ』（昭18・6・10、室戸書房）、『川上音二郎』（昭18・8・18、三杏書院）、『楠木正行』（昭19・

2・15、室戸書房）等を書いた。

\* 吉野の朝霧―北畠親房―  
よしののあさぎり  
きたはたけちかよき  
書き下ろし長篇小説。（初版）昭和十八・十・二十五、三杏書院刊。◇「伊勢の国」「慟哭の書」「沼」「花の悲懷」「京洛の風」「未春の賦」の六章と、「北畠親房年譜略」から成る。後醍醐天皇をひそかに吉野山に迎え、南朝を立て、南朝政治軍事の中心的存在となった北畠親房を描いた歴史小説。

（浦西和彦）

赤瀬川準（あかせがわ じゅん） 昭和六・十一・五。

小説家。三重県に生れる。本名赤瀬川準彦。大分第一高校を卒業後住友銀行勤務ののち文筆活動に入る。『球は転々宇宙間』（昭58）で吉川英治文学新人賞受賞。『捕手はまだか』『さすらいのピア樽球団』他。イラストレーターで芥川賞作家尾辻克彦（赤瀬川原平）の兄。

\* 潮もかなひぬ  
なみもかなひぬ  
小説。（初出）『別冊文芸春秋』昭和五十八・十。（初版）昭和六十・六、文芸春秋社刊。初出発表時に直木賞候補となる。出版に際し大幅な加筆がなされている。◇当初額田王を中心とする物語であったが「柿本人麻呂の歌と人物の謎解きを中心に

据え」、万葉集の歌を万葉仮名表記から韓国語の類似の発音を探し、そこに「隠れた別の意味」を探ろうとする。

（浅田 隆）

阿川弘之（あがわ ひろゆき） 大正九・十二・二十四

小説家。広島市に生れる。東京帝国大学文学部国文学科卒。広島高校時代に国語の教授で万葉学者の中島光風に影響される一方、志賀直哉に傾倒して「こそろ」同人となり、卒業論文も「志賀直哉」を書く。在学中に海軍予備学生を志願し、卒業と同時に入隊、通信課報作業に従事し、漢口で敗戦を迎える。昭和二十一年九月「年年歳歳」「霊三題」を発表、短篇集『年年歳歳』（昭25・9）を刊行し、執筆活動を続けるが、二十八年「春の城」（昭27・7）で読売文学賞を受賞して作家としての地位を確立した。三十年、ロックフェラー財団のフェロウとして渡米。四十一年「山本五十六」（昭40・11）で新潮社文学賞受賞。戦争体験と広島を題材にした作品が多いが、旅行にもよく出かけ、旅行記や乗り物についてのエッセイも多くある。四十四年から四十八年まで日本ペンクラブ専務理事。『阿川弘之の自选作品』全十巻（昭52・53、新潮社）があ

る。

＊大和路（じやま） 小説。（初出）「こをろ」昭和十四・十。（収録）『阿川弘之自選作品Ⅹ』（昭53・6、新潮社）。◇矢山哲治や島尾敏雄らと作った同人雑誌「こをろ」の創刊号に発表した、阿川が十代のときの習作。「法隆寺金堂の壁画と夢殿の秘仏観音とが半年ぶりに開かれてゐるのにふと気がついた立石梓吉」が「大和路への旅に出かけ」て、「高等学校の時代以来長く親しくしてゐた」Aと偶然出会い、法隆寺から博物館・猿沢の池・大仏・春日神社・三月堂・二月堂などを回る一日が描かれている。

「方向や道や目標が立ったと思ふのは僕にはやっぱり間違ひの様な気がする。救いは混乱を自覚する事それから自覚して謙虚にある事」という人生と向き合う態度が表明されているが、「西方大壁の弥陀浄土の壁画」や「救世観音」の鑑賞の描写に、広島高校時代の阿川の、大和路への思い入れが映し出されている。「『あんなもの、志賀直哉と和辻哲郎の二三冊も読めば誰だって書ける』と悪口を言われた」という「大和路」発表の際の反応は、「私の自画像」

（昭45・12）で回想されている。

＊雲の墓標（はくもの） 小説集。（初出）「新潮」昭和三十・一・十二。（初版）昭和三十・一・四、新潮社刊。（収録）『阿川弘之自選作品Ⅰ』。◇「阿川弘之自選作品Ⅰ」の「作品後記」によれば、広島高校時代の友人である大浜巖（いわ）比古の「使ひと称する未知の男」が突然訪ねて来て、特攻要員として死に直面させられるまでの日々の丹念な記録をつけてゐた「吉井巖の日記を置いていった。この日記に感銘した阿川が「それまで漠然と考へてゐた材料を捨ててこちらへ切り替へることにした」というのが、『雲の墓標』の制作事情である。

この小説は、昭和十八年十二月十二日から、出撃命令が下る二十年六月二十九日までの、主人公・吉野次郎の手記というスタイルをとっているが、京都大学文学部の同級生であつた吉野や藤倉といった青年が、それぞれどのようにに戦争や死に向い合つていくかを描いた。阿川の代表作と言うことができる。主人公は作中で「大和三山や二上山や山辺の道や布留川（ふりゅうがわ）のながれや、昨今の冬、万葉旅行でみんな歩いた土

地のことを言ひあふだけでも、自分の心は此の上もなくなくさめられた」と、心情を吐露している。「大和の風物、そして万葉集は、なんといつてもわれわれが生涯をかけた心の拠りどころ」であり、同時に死に向けて「気持をひとつにひきしほ」るため「やうやくに振り捨て」る対象でもあつたのである。

「大和の風物」に対するこのような心情には、広島高校時代の恩師・中島光風の影響が読み取れる。「私の中の日本人——中島光風先生——」（昭50・5）で「はつきり文学の道へ進まうと思ひ定め」る際に「大きな影響を受けた人」として、志賀直哉と中島光風の二人を挙げる阿川は、一年生の時に受けた万葉集の講義や、課外の万葉輪講会や短歌会の様子を、生き生きと回想している。「雲の墓標」で、「万葉集や古事記や祝詞が話のなかにふんだんに出て来、『すめらみいくさ』とか『かんながらの道』とか『かけまくもあやにたふとき』とかいふ言葉の連続で、要するに何の話か全然わからない」「へんな人の講話」に距離をとっているのも、古典に日本精神の根柢を求めるといった体

の民族主義的発想とは異なる素養を、阿川が身につけていたからであろう。なお『雲の墓標』制作事情は、「友をえらばば」（昭33・11）の中でも書かれている。また本小説は新潮文庫に収録されている。

\*友をえらばばともしばば 小説。（初出）『小説新潮』昭和三十三年十一月。（収録）『青葉の驕り』（昭36・1、講談社）。『阿川弘之自選作品Ⅲ』。◇『阿川弘之自選作品Ⅲ』の「作品後記」によれば、共に中島光風の影響を受けた広島高校時代の友人・大浜巖比古が、この作品に登場する大津谷光彦のモデルである。大浜（大津谷）はこの作品以外にも、『霊三題』（昭21・9）『京都の万葉学者と私』（昭36・1）『古いトランク』（昭38・4）『寒雲』と私（昭48・12）『大浜巖比古著『万葉幻視考』』（昭53・2）などにも登場する。万葉学者であった大浜巖比古について書くとき、阿川の筆は万葉集にも自然と触れることになるが、その筆致からは万葉集に対する眼を開かせられた広島高校時代への愛着が伺える。ちなみにこの作品の中では、「私などの古典熱が多分に付焼刃の

傾向があったのに反し、大津谷は大和や吉野や飛鳥の地を本気で愛した」と対照しながらも、「二十年前、私たちは広島高等学校の文科の学生で、一緒に雑誌を作ったり、短歌会を催したり、大津谷を可愛がってゐた小島青風といふ国文の先生を中心に、野山に小旅行を試みたりして、謂はば私たちの、若い、『かぎりなき夢』を育ててゐた」と記している。

\*空から見た日本（たにほん） 随筆。（初出）『世界の旅10 日本の発見』昭和三十三年七月・九、中央公論社刊。◇大宅壮一・桑原武夫と共に編集委員をつとめた『世界の旅』シリーズの、十巻目の「解説」として書き下された。「大津の草飛行場」から「八時過ぎ離陸」した阿川は、京都・大阪・尼崎・神戸をセスナ機上から眺めながらやがて奈良上空に達する。「生駒の山を越えてから」臭い空気が入って来なくなったのに気づいた「阿川は、『ここ』まで来ると、空も美しく、松の林も美しく見える」と言う。「阪神沿線は、昭和初年のよき住宅地であったが、今後阪奈沿線の生駒山から東が、そうなる可能性がありそうに思う」の

である。「奈良のドリームランド」は「奈良に出来たオデキ」であり「誰がそれを奈良におくことを思いつき、誰がそれを許したのか？」と批判的に書きつける阿川は、「守られて然るべき古い美しいものが、メチャメチャに近代化（？）されてかえりみられない」と慨嘆する。「しかし、オデキを除いた奈良の都は、二月堂、三月堂、大仏殿、春日の杜、若草山、やはり美しかった」のである。  
\*蛙の合唱（がわらう） 随筆。（初出）『別冊文藝春秋』昭和四十九年秋季号。（収録）『鮎の宿』（昭50・12、六興出版）。『阿川弘之自選作品Ⅳ』。◇青春期に傾倒し、戦後就職の世話を依頼したこともある志賀直哉について、阿川は「巢立ち」（昭21・6）、「志賀直哉の生活と作品」（昭30・10）、「葬送の記」（昭47・1）、「論語知らずの論語読み」（昭52・8）、「末の末っ子」（昭52・10）、「あくび指南書」（昭56・4）、「桃の宿」（昭57・3）、「天成の文体と刻苦の文体」（昭60・春季）など多くの文章を書いているが、「蛙の合唱」もその内の一篇。「奈良上高畑の先生の旧居が、近く取りこはしの運びになるやうです。許

さるべきことではありません。県が奈良市に働きかけて、文化財として永久に保存すべきだと考へますが、貴見如何」という問合せに対して、「先生は、残るのは作品だけでいいといふ考へで」「御本人が生きてをられたら、昔住んだ家を保存するために要する人手とか、現在の持主が蒙る迷惑とか、それを思つただけでもいやだと、まづ先に反対したのではないかと思ひますが」と返事したという、興味深い挿話が挟まれている。

\*室生寺ふたたびむろなうぢ 隨筆。(初出)

「旅」昭和四十九・十一。(収録)『鮎の宿』(昭50・12、六興出版)。「阿川弘之自選作品X」。◇東大寺管長であつた上司海雲師と偶然新幹線で乗り合せ、奈良駅前の汁粉屋で抹茶を御馳走になるといふ挿話も書き込まれたこの隨筆の眼目は、題名からも分るように室生寺再訪の件である。「ふたたび」といふのは、「三十数年前、天下の形勢がだんだん怪しくな」つてきた学生時代に室生寺を訪れていたからで、その折のことが「私も学生の間では、和辻哲郎の『古寺巡礼』を片手に、飛鳥大和の

寺々をめぐる歩くのが、一つの流行になつてゐた」と回想されている。『古寺巡礼』の文章を、少々甘酸っぱいやうな思ひで「かつて読んだ阿川は、一面観音の前で、「和辻哲郎の本を手にここを訪れて、それきり帰つて来なかつた」者が多くいたことを思い起している。

\*鮎の宿あづのしゆく 隨筆。(初版)『鮎の宿』

昭和五十・十二、六興出版刊。(収録)「阿川弘之自選作品X」。◇「阿川弘之自選作品X」の「作品後記」によれば、六興出版から隨筆集を編みたいといつてきた折に、「ついでには室生寺ふたたび」のやうな紀行かエッセイを一本書き下して加へよとの註文で「奈良京都へ日帰りの清遊をして書いたのが『鮎の宿』であつた。秋篠寺へ向う阿川は「近鉄西大寺で電車を下りて寺への道は、昔来た時とはすっかり様子が變つて見えた」といふ印象を抱くが、「變つてしまつたのはあちら様ばかりではないらしい」と気づく。「かつて苦しく甘酸っぱいこちらの身辺的事情から涙をこぼす思ひで仰いだ」伎芸天女が、「生々しすぎてどうもそれ程ありがたくない」

のは、「齡のせる」らしいのである。秋篠寺から阿川は、志賀直哉の短篇に出てくる興福院、志賀直哉がよく立ち寄つた二月堂の裏の茶所、上司海雲和尚の墓がある空海寺を訪れて、奈良を後にしている。

\*黒い煎餅くろいせんい 小説。(初出)「新潮

昭和五十四・一。(収録)『テムズの水』(昭57・6、新潮社)。◇「奈良の都が平安寛都をせざるを得なかつた理由は、大和盆地には大きな川がありません。

人口が増え、咲く花の匂ふが如き大路に糞尿があふれかへつて始末がつかなくなつたからだといふ説があるんです」と、「珍しい史実(?)」を「物識りの知人」が教えてくれる場面がある。

(和田博文)

秋元松代あきもとまつと 明治四十四・一・二。

劇作家。東京都生れ。幼時に父を亡くし、また病弱であつたため義務教育のみで学校を去るが、兄らの影響で文学全集、近代劇全集などに親しみ、その知的好奇心を満たした。戦後、三好十郎が主宰する戯曲研究会に参加、昭和二十一年処女作「輕塵」を発表した。以後、戯曲、ラジオドラマ、テレビドラマの脚本を主に手